

# Views from Orienteering

村越 真

## リスクマネジメントの普遍性

10月後半に、登山雑誌に掲載するリスクマネジメントの記事を書いた。2年間集めたデータを分析し、論文にするはずだった内容だが、編集者に持ちかけたら、ちょうどリスクマネジメント特集を企画していたので、そちらの方への掲載が先に決まってしまった。原稿を書き上げ、ゲラで校正に取りかかった時、勤務先の小学校で受け入れていた大学の教育実習生への離任式の講話を用意することになった。内容を構想しているうちに、話したいことは全て、この雑誌原稿に書かれていることに気づいた。雑誌社から戻っているゲラのpdfをプリントアウトして、そのまま講話の資料として配付した。いくらなんでもやり過ぎだという気もしたが、専門職を目指す学生に、「どんなことからでも共通した指針を学ぶことができるのだよ」という謎かけでもある。

原稿の内容は、前にも紹介した、高所登山家のリスクマネジメントの方略をインタビューの分析から明らかにしまとめたものだ(岳人、2013年12月号参照)。

その骨子は、①自然の中には不確実性が不可避に存在すること、②不確実性を制御可能性によって事前に回避すべきか現場判断での回避に委ねてよいかを識別すること、③現場判断でよいとしたものについては、常にその場の情報(オンサイト情報)に気を配りリスク変化に注意すること、④トラブルに見舞われた時はもちろん、そうでない時も運がよかったと考え、リスクについて振り返ること、からなっていた。

考えてみれば、オリエンテーリングのトップ競技者は全てこれをやっているのだ。ナビゲーションの最中、常に不確実性はつきまとう。その場ではにっちもさっちもいなくなることを自覚し、その予防のためにルートプランによってリスク回避を行う(その代表格がエイミングオフだ)。ミスをした時はもちろん、そうでない時もレースアナリシスによって次のリスク回避を行う。オリエンテーリングと登山とを問わず、自然という不確実な空間で事を成し遂げようとする熟達者たちには、こうした発想法が共通して必要なのだろう。

研究上の興味から探っていた文献で、こうした意思決定が「自然主義的意思決定論」という名の下に一定の研究成果を出していることを偶然知った。首謀者であるゲーリー・クラインは、その著書によればオリエンティアなのだそう。人は時として自分の思い込みにとらわれ、外部からの情報を無視する。地図と現地が合わない。地図が違っているのだろうと考える。だが、突然そうではないことに気づき、それまで矛盾だらけだった情報が実は一貫したものだだと分かる。彼はその瞬間をスナップバックと呼んでいる。もちろん、それはオリエンテーリングで彼、そして私たちが時々体験していることだ。

ナビゲーションに対する考え方や登山でのリスク対処が相似だったのは、まあ想定内だった。だが、教育実習と教職への道筋についての講話をしながら自分自身驚いたのは、話しに全く破綻が生じなかったところだ。「これは登山の話なので教職とはちょっと違うが・・・」とエキスキューズする場面が、部分的にはあると思っていたのに、あまりにもすんなり話し終えてしまった。

ナビゲーションという発想の普遍性がさらに広がった瞬間だった。



クライミングもナビゲーションも、その本質はリスクとの戦いと、それを手なづけることの快感に成立している。

(撮影：増本亮)

## 東京地形萌え

小学校校長に就任して早7ヶ月。早朝起床、週2日の小学校勤務は大学やオリエンテーリングの仕事の負荷がほとんど変わらない中では厳しいものがあるが、辛いことばかりではない。11月は修学旅行、12月は持久走大会と楽し

い行事が待っている。

本校の修学旅行は東京。今では珍しくなった2泊3日だ。メインの2日目は、定番の国会議事堂見学の後、スカイツリーとディズニーランドを訪れる。昔東京タワーに一度登った日はあいにくの雨で、何も見えなかった。今日は初冬の好天。やや寒いが、大気も澄んでいて絶好の展望が得られるだろう。

期待は裏切られなかった。眼下には隅田川が悠然と流れている。両側に緑の隅田公園が広がり、言問橋が結んでいる。在原業平が都にいる妻の安否を都鳥に言問うたという伝承にちなんでいる。そのたもとでは、今でも言問団子が売られているのだろうか。

さらに目を西にやると、やはり広大な緑地が見え、そこから北西に細長い緑が続いている。上野の森とそこから武蔵野台地の東縁に伸びる海蝕崖に沿った斜面緑地である。街に埋もれて地形自体を見ることはできないが、緑地によって地形のひだを感じる事ができる。斜面緑地があるからこそ、江戸は緑地を東京誕生まで残すことができ、低地・台地と相俟って、当時の世界三大都市としての人口を抱えながらも、当時としては世界最高水準の衛生環境と江戸名所図会に描かれた余暇空間を生み出していたのだ。駿府に住むものとして、これだけの資質を持ったこの地を首都に選んだ家康の先見の明に鳥肌が立つ。もっとも江戸の資質を見抜いたのは家康が最初ではない。戦乱の世も終息しようとしていた16世紀末、太田道灌は、築城の適地を求めて、そのころはまだ平地も十分になかったこの地を選んだのだ。子どもそっちのけで、一人感動に浸っていた。

その日の朝、宿泊地である品川プリンスの周辺をジョグした話しをすると、子どもたちが「どうして誘ってくれなかったの」と言う。じゃあ、ということで翌朝は6時にジョギングに出かけることにした。「よし、明日の朝は富士山に登りにいくぞ!」。

集まった子どもたちを連れて、国道15号を南下すると、1kmちょっとで品川神社に着いた。そこから武蔵野台地の海蝕崖を登ったところに富士塚がある。何合目という石柱も立つ本格的な「登山道」だ。子どもたちには、江戸時代に宗教上の理由で多くの人が富士

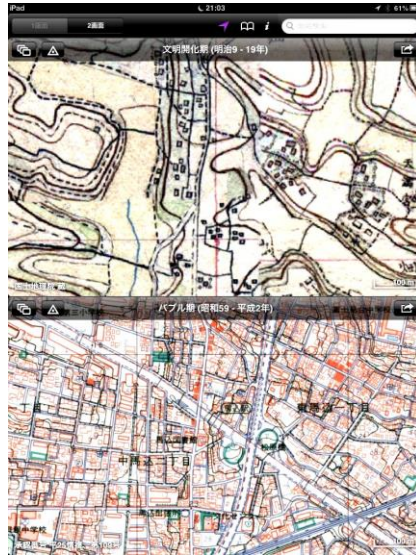
山を目指したこと、いけない人もたくさんいたこと、それらの人が富士塚に登って、それを代替したことなどを話してあげた。思いつきでこんな場所に連れていってあげることができたのも、昨年2月の東京ロゲに出場したからこそだ。併せて最近の東京地形ブーム。村尾嘉陵の「江戸近郊みちしるべ」から貝塚爽平の東京の自然史、さらには東京スリパチ地形まで読み漁って、明らかに街を見る目が変わってしまった。

正月には大森の実家に帰って、さあジョグという時に、意図しないうちに脚は馬込の丘陵地に向かっていた。実家にいた大学生時代なら、こちょこちょした街路を嫌って間違いなく臨海部を目指したのに。九十九谷と呼ばれるこのエリアは、古代には貝塚が、中世には源氏ゆかりの様々な伝承が、そして明治から大正にかけては、豊かな田園風景に引かれて多くの文人が住み、馬込文士村と呼ばれた。古代からのこの地の歴史と文化は、入り組んだ丘陵の地形が育んだといってもよい。住んでいたころから無意識に魅力を感じていた環七通りと第二京浜の交差点である松原橋のかっこよさも30年たって言語化することができた。谷地形を遡上する環七と台地を交差して直線上に走る第二京浜の自然の高低差を利用した立体交差だからだ。昭和14年にできた日本初のインターチェンジでもあるらしい。

余勢を買って、「東京時層地図」を購入した。2500円と、Ipadのアプリとしては高額だが、東京から横浜にかけての都市部を明治初期からバブル前夜までの6つの時点の地図と空中写真を2枚並べてみるができる。延々見続けても飽きない。現在の山手線以西は江戸期には郊外だったことは「武蔵野」を読むと分かるが、それが地図としてリアルに比較できるのだ。これがあったら、「江戸末期の東京郊外」でパーティールンオリエンテーリングなんていうのも夢じゃない。ホント、やばい。



今では想像だにできないかつての馬込付近。高橋松亭による版画「都南八景之内馬込」で往時を偲ぶことができる。あ、向こうの森でオリエンテーリングできそう♪



Ipadの「東京時層地図」下が、ほぼ現在の環七と第二京浜が交差する松原橋の陸橋。上が同じ場所の明治初期の地形図。手書きっぽい線がラブリーだ。見比べると環七が谷を利用し、第二京浜が台地を横切っているのが分かる。さらにその一本西に南北に走る道路が古い尾根道だということも分かる。

## ライバル

CC7のレースが終了して、いつものように山川氏を労(ねぎら)いにいくと、「おまえはライバルだからな」という。30歳代前半は、彼がマッパー・プランナーとして、僕が競技者としてしばしば「競い合った」。こちらが打ちのめされることもあれば、これでもかというタイムを出して、こちらが叩きのめすこともあった。だが、今じゃあ、僕もMSを走る歳だ。やや怪訝に思っていると、彼が付け加えた。「イベントプロデューサーとしてだよ」

オリエンテーリングの大会こそほとんど手がけていないが、自分が主催するロゲイニングだけで年間1.5回。その他に雇われディレクターをしているのが1-2回。お手伝い数回。トレイルランニングだけでも3大会。大きなオリエンテーリング大会にはかなわないものの、それらは200-300人規模での人を集め、何よりも顔の見えない人たちのリピートも呼んでいる。

もちろん、その背後には地道な努力も、ひらめきのアイデアもあったりする。なにより自分はイベントというサービスを通した「お・も・て・な・し」が好きなのだと思う。トレランにしるロゲイニングにしる、原点は、自分が走って楽しいと思えるコース、エリアだ。「ねえ、ねえ、見て・走って。こんないいところがあるんだよ。」そんな感じ。そして、ローカルなアットホームさと

グローバルスタンダードな運営技術、40年間のプロデューサーとしてのスタンスはほとんど変わっていない。世界選手権だって、監督たちを完璧にこちらのペースに引き込んでやったからな。そんなイベントプロデューサーとしての来し方を一瞬思い出し、それと同時にオリエンテーリング界では、最大の評価と集客を誇る山川氏にライバル呼ばわりされたことを誇りに思った。



抜群の集客を続けるCC7。これも山川氏のオリエンテーリングへの愛があればこそだ。

(村越 真)